
彼の背中

さすらいのかえる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼の背中

【コード】

N9865A

【作者名】

さすらいのかえる

【あらすじ】

好きだった背中があった。雑踏の中を歩いていると、見覚えのある後ろ姿に一瞬息が止まる・・・

私は雑踏の中を歩いてきた。ふと何気なく前を歩いている人を見たら、後ろ姿に一瞬息が止まった。に、似ている。

本物かな……。いや、彼はもういない。でも、今、手を伸ばせば届きそうな所に、私の好きだった背中があった。横顔さえ見ればわかる。確認したい気持ちと、したくない気持ちで心が揺れた。心臓の鼓動がはやくなる。

あと少し、ほんの少し速く歩けばいいのだ。でも、私の足は動かない。

私はしばらく後ろ姿を追って歩いていた。背中を見ていると、彼と一緒に歩いてきた時の記憶が蘇る。ぼくと思い出した記憶に浸っていたら、後ろ姿が遠ざかっていた。見失いそうになる。どうしよう……。

あ、私が迷っている間に、追っていた後ろ姿が人混みの中に消えてしまう。追いかけようと思うけど、やっぱり私の足は動かなかった。もう確認できない……。

後悔と喪失感に押しつぶされそうになる。その時、周りで歩いていた人達とぶつかりそうになった。あ、自分が立ち止まっている事に気付く、そして、私を避けるように歩く人達が、怪訝そうに私の事を見ている事にも。

私は無意識に立ち止まって泣いていた。

泣いている事を意識したら、だんだん自分の弱さに腹が立ってくる。ほほを流れた涙のあとが冷たい。

あゝなに泣いてるんだ私は！ 確認したからって何もならない事はわかってるのに。

私は目をとじて、彼の事を想う。うん。まだ彼は私の中にいる。大丈夫。

目をあけて空を見上げる。そして、私はまた歩き出した。

おわり。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9865a/>

彼の背中

2010年11月24日11時17分発行